連載 音は語る ㊻

希望伝えたドゥダメルの《復活》「怒りの日」の祈り ファウストのイザイ

文 藤盛一朗

一国の大統領が他国の特殊部隊によって拘束され、国外に移送される。2026年の年明けは、ベネズエラ発の国際ニュースが世界を駆け巡った。だが、作戦を進めた米国の政権に悪びれる様子はない。2022年のロシアのウクライナ侵攻後、世界は国際法の尊重という原則が吹き飛び、たがはずれてしまったようにみえる。

そのベネズエラ出身のグスターボ・ドゥダメルがロサンゼルス・フィルを指揮した来日公演のマーラーの交響曲第2番《復活》（2025年10月25日、サントリーホール）を思い起こす。ドゥダメルは、ベネズエラの誇る「エル・システマ」の音楽教育を受けた。武器ではなく楽器を――。貧困家庭の子どもたちに音楽を奏で、才能を花咲かせる機会をもたらしたエル・システマによってもっとも華々しく羽ばたき、活躍してきた存在こそドゥダメルである。

マーラーの交響曲第2番《復活》を演奏するドゥダメル指揮ロサンゼルス・フィル。合唱は新国立劇場合唱団
© 松尾淳一郎

最後の審判のラッパ

ドゥダメルの《復活》は、きわだってメッセージ性に富んでいた。第4楽章「原光」から終楽章に入り、世界が崩壊するような厳しい音楽の後、最後の審判のラッパが響く。やがて「復活」のコラールへと移る。聴きなれたはずのサントリーホールの空間の中で、あらゆる音が立体的に響く。

マーラーの死への神経症的な怖れと、そこからの解放の願望という矮小な表現ではない。ドゥダメルは心底、キリスト教の終末論を信じ、その際のあらゆる死者の復活と裁き、そして御心にかなう者は永遠の命を得て神の国が実現するという物語をこの音楽に見ていることが感じられる。演奏は、その具体的でかつ総合的な表現であり、最後は驚くほど明るく、また希望を伝える音楽となっていたのだった。

演奏を終え、笑顔をみせるドゥダメル　© 松尾淳一郎

聖ミヒャエル教会の体験

マーラーがこの曲の創作に着手するきっかけとなったのは、1894年にハンブルクの聖ミヒャエル教会で行われたハンス・フォン・ビューローの葬儀だった。「上のオルガン席から合唱団が、クロプシュトックのコラール《復活》を詠唱し始めたのです！…… 稲妻の一撃、これこそいわゆる聖なる受胎と言えましょう」と、マーラーは書簡につづっている（「マーラー 交響曲のすべて」藤原書店）。「死は終わりではない」という信仰をマーラーは確信し、ドゥダメルはおそらくこの時の作曲者の体験を意識して合唱や管楽器、オルガンが上から降り注ぐように響くことに心を配ったのではないだろうか。

この公演は、世界の分断と対立、国家による暴力が広がる中、視覚的にも再生の希望を伝えていた。ドゥダメルがヒスパニック系であるばかりでなく、ヴァイオリンを中心に、ロサンゼルス・フィルの弦のメンバーは、韓国にルーツを持つ人などアジア系が目立つ。移民の国、米国が本来、活力の源泉としてきた多様性を体現している。

そしてこの地で学んだヴァイオリニスト、金川真弓にインタビューで教えられたことだが、ロサンゼルスは欧州や旧ソ連からの移住者が音楽家や教育者に多く、欧州の伝統が多様なナショナリティの人々にもたらされ、息づいている。そのことがこの日の優れた演奏から伝わってきた。

マーラーが交響曲第2番作曲の着想を得たハンブルクの聖ミヒャエル教会　（https://www.orgelstadt-hamburg.de/ サイトから）

無伴奏で休憩なし12曲

《復活》が音楽の物語の基盤とする「終わりの日」のテーマは、イザベル・ファウストの「無伴奏の夕べ」でも中核をなしたと思われた（1月28日、王子ホール）。

18世紀イタリアのタルティーニで始まり、20世紀のイザイの無伴奏ヴァイオリン・ソナタ第4番で結ぶ12曲。ファウストは休憩をとらず、一つの物語のように続けて演奏した。約1時間半の長さを感じさせない。傑出した音楽家ならではの時のマジックである。シャリーノやマッティス（父）といった作曲家の名から曲が思い浮かぶほど身近な音楽ではない。ファウストにいざなわれるまま、音楽の旅をする。

冒頭は、ガット弦の重音が醸す温かな音色に心安らぐ。曲はタルティーニのヴァイオリン・ソナタ第17番。続く曲は、弱音のフラジオレットが、風のような音を立てる。時を超え、大古からのメッセージであるようにも、大昔の人が歌う歌のようにも聞こえる。シチリア島出身のシャリーノの1976年の作品《六つのカプリース》より第2番だという。

王子ホールの「無伴奏の夕べ」で演奏するイザベル・ファウスト
（© 王子ホール／撮影：藤本史昭）

第3曲は、ああバッハかと思えばすぐに一転してイザイ作品であると気づく。無伴奏ヴァイオリン・ソナタ第2番。バッハの《パルティータ》第3番プレリュード冒頭の引用に続く曲想は厳しく、「最後の審判」の教えに基づくグレゴリオ聖歌「怒りの日」の旋律となる。

この作品は、第一次世界大戦が終結して間もない1924年に発表された。「怒りの日」旋律を聴いて思い出したのは、この日の朝、テレビの伝えたウクライナからの映像だった。

真っ赤な炎に包まれた列車の車両。ハルキーウの近郊でロシアのドローン攻撃を受け、初報段階で4人が亡くなった。ホールに向かう夜の銀座の通りでは、ブティックの商品をたくさん抱えたロシアの観光客を目にした。この落差は何なのか。「いったい正義はないのだろうか。この世に真実があるかどうか見てみようよ」というドストエフスキーの「罪と罰」の一節を思い出す。

正義の裁き求める懇願

第2楽章は、一転する弱音の中から、やはりかすかに「怒りの日」の旋律が浮かびあがってくる。第3楽章は、温かなピッツィカートからバグパイプ風の響きに移る。パストラーレ。その中から、再び「怒りの日」が聴こえてくる時、それは、終末や裁き、地獄落ちと裏表の恐怖の表現ではなく、むしろ本来の聖歌のもつ祈りの性格が強くなり、さらには「正義」による裁きを求める懇願のように響く。終楽章は再び曲想が激しくなり、不協和音が交じる。そこから折々に聴こえる「怒りの日」は、もはや悲痛な、人間の声の祈りであり、正義を求める訴えと受けとれる。

全体の結びに選ばれたのは、同じイザイのソナタ第4番ホ短調。バッハ風の峻厳な第1楽章「アルマンド」から第2楽章「サラバンド」に移り、その終結に向かう部分でファウストがみせた技巧に息をのんだ。右手の弓遣いの驚くべき柔らかさ。そこから繰り出される軽やかな音は、天のゆりかごという言葉を連想させる。そして終結に至る高速パッセージは、光の差すようなホ長調となった。

米国で発表される「世界終末時計」はこの1月、核戦争による終末まで「85秒」と、戦後最短という危機感を示した。東西間の核軍縮が進んだ1991年は「17分」だった。破滅の淵に立つかとみえる2026年の状況の中で、ファウストは、それでも希望を伝えようとしたのだと知る。M